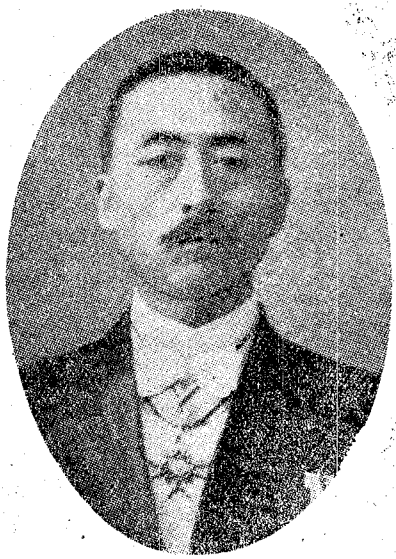
說苑

道路改良會首腦部と道路問題の推移

―近藤虎五郎氏―



清水生

土木事業界の過程

我國の土木事業の概略とその基礎の稍〻確立さるゝに至つたまでの過程を見ると、治水の如きは明治維新前には沿川には幕府領、藩領又は旗下領等があつて、それが恰も犬牙錯雜の狀態を示し從つて其の境域も頗る復雜であり、河川の狀態は自然以外に人爲的にて惡化せられて、毎年夏秋の交に至れば必ず水害に見舞はれる有樣であつた、從つて

各自領土の保安のみに焦慮して河川工事は全く自衛の目的のみなるを以て敢へて他境を顧みると云ふやうなことはなかつたのである、然るに明治維新以後は新政府に依つて一般國土の保安上重大なる利害關係を持つ河川に對して統一せる所謂治水策を樹立して、直轄施行するの方針を定めたのである。併乍ら當時我國の土木事業に關する技術的方面は未だ發達を見さるために明治五年には和蘭からの工師フアン・ドールンを始め數多の工師を招聘して、淀川の實測並に調査を行ひ翌七年には其の工事に着手してゐるが、これが明治政府に依る治水土木事業着手の嚆矢である。其後順次利根信濃等々と各河川の治水に及ぼしてゐるか、兎も角最初は全く外人の技術者に依つて爲されたのである、然るに明治十三、四年頃からは我國土木技術者としての大先輩たる古市博士始め沖野、石黑、山田、田邊の諸氏は海外留學から歸朝し又追々大學出身の多數技術者も政府に奉職するに至つて茲に始めて我國の治水事業は外人殊に和蘭工師の手を離れて本邦の技術者に依つて治水計畫並に工事が施行さるゝに至つたことは誠に我國の土木界のため慶賀すべきことであつた。又港灣方面に於いても又我國は云ふまでもなく所謂環海の島帝國であるから從つて良港灣には乏しくないのであるが、幕府時代工學技術の進歩せざるために之れが改築修造をなさんとしても到底至難の業たる所以その多くは自然の變遷に放任せられてゐた狀態であつた、德川幕府の末葉彼の外交條約を締結して五港を開くことを約したるも、各港は何れも設備の改善としては何等見るべきものはなかつたが、世は王政復古となり、明治維新政府の設立に至つて港灣問題は漸く擡頭して意を港灣の修築に用ひ始めたのである、而してこの港灣修築については最初は外人工師を雇用してその技術的智識手腕に依存してゐたが、追々邦人技術者の輩出に依つて修築計畫改良等敢て事業の大小を問はず總て我國技術者の手に依りて施行せらるゝに至つたことはこれ又曩の治水事業と共に我國土木技術の進歩發達に依る結果に外ならないのである。

近藤博士の略歷

其他道路問題にしてもまた上下水道の施行にしても果た又水力電氣にしても其他有ゆる國家富力增進の基底をなす土木事業の遂行は畢竟優秀なる技術者の輩出如何に依つて偉大なる仕事が成し遂げられ顯著なる功績が殘されるのであるが、工學博士近藤虎五郎氏の如きは筆者の見るところによると博士は主として土木事業の諸計畫及び技術監督方面の仕事に當つてゐた關係上、土木事業、そのものには餘り遺されてゐないが、地方技師を克く博士は指導して全國に亙る土木事業の遂行に遺憾なからしめたる功績や、誠に多大である、斯くの如き人物が中央技術部にあつてこそ我國の土木技術界は現在の如き長足の進步發達を來たしたのであると云つて敢へて過言ではないのである。

近藤博士は維新の黎明期である慶應元年六月に現在の新潟縣卽ち當時の越後の國岩船村上本町に生れてゐる尊父近藤金彌氏は村上藩の中階ところの藩士にして博士は長男である。明治十三年に東京帝國大學の法理文學部に進學生として入學したが後ち工科大學の特待生となつてゐる、而して明治二十年七月に同大學の土木工學科を優秀な成績で卒業すると間もなく私費を以て米國に留學して彼地でコロンビヤ大學其他で工學を更に專攻して歸朝して明治二十三年六月內務省の五等技師となり玆に始めて官途についたのである、更に同年八月土木監督署の技師となつたが、二十八年再び內務技師となつて專ら地方土木事業の監督に從事し、なかでも上下水道工事並に港灣の修築工事などの發達普及には特に盡瘁するところ多かつたがこの傍ら東京帝國大學工科大學に於いて前後二十四ケ年間講師及び教授の任に當つて幾多有位の學生を指導してゐる、また明治三十二年には工學博士の學位を授與されてゐるが同三十五年には萬國航海會議に參列と同三十九年には歐米各國の主として土木事業の視察等歐米に赴くこと前後三回に及んで居る、更に明治四十四年には鐵道院技師を兼任し以來十二年間軌道監督の事務に參與してゐるが他面又農商務省から漁港修築に關する事項の調査を委託せられてこの方面に對して非常に盡瘁する

ところがあつた、更に明治神宮造營局參與震災豫防調査會及び治水調査會等各種の委員となつて居る、又道路改良會の創立に當つても關與して本會創立當時から理事として活動せられ又本會が東京市路面改良事業の調査の時などは牧博士と設計立案の任に當られたのであつた、かやうに我が土木技術の先輩にして權威者であつた博士も大正十一年の初春から胃癌に禍いされて七月に至つて症狀は急變を來たして遂に同月十七日に齡い五十八歳を以て他界されたのであつたのは誠に惜むべきである。博士は正三位勳二等を賜つてゐる博士の令夫人は我學界の泰斗前の東京帝大總長加藤弘之男の長令孃である。

これが近藤虎五郎博士の略歴である。

藤宮氏の博士觀

そこで筆者は彼の漢時代における歴史家の泰斗太史公司馬遷は……凡そ人物を評するには、先づ其の人物に直面せよ、已れに於いて其の人物を見定め、然る後ち其の人物と親しき者に遇ふて批判を聞くに若かず……との意味で人物觀を說いてゐることに想到して偶々筆者は拙文以て博士の一端を描寫するに當つて既に博士とは幽明異にして居るから對面する能わず依つて生前博士を克く知つて居る人士に聞くより他途なきと思ふてゐたところ幸にして筆者は常に敬意を抱く鈴木技監は藤宮工學士を紹介して呉れたので某日神奈川區澤渡の邸に藤宮惟之氏を訪ふたのであつた、藤宮氏は心克く直ちに筆者を玄關左側にある應接室に引見して終始微笑を以て筆者訪問の趣旨に對して、雜談的に。

近藤博士は實に立派な人でした、博士は舊越後村上藩の出身で私の父が博士の嚴父たる金彌氏とは頗る懇意の間柄であつたのでその關係で私も博士の後輩として時々博士に御目にかゝりその指導を受けたこともある。博士は確か明治二十年東大工科大學を卒業せられたが、大學時代は長尾半平氏等と共に村上藩の進貢生であつたやうに聞いて居る。

とて茲で氏は當時村上藩ではその領内に鮭が澤山とれるのでその收入を以て秀才子弟の教育費補助に當てゝ居たと

とを話されたあとについで。

博士は實に外國語は達者で殊に英佛語は自由に克く話された、私が朝鮮總督府に奉職から山形縣の土木課長として內地に歸つたのも博士の指導に依つたものであるが全體近藤博士は土木行政の先生と云つて可なりである。始めは內務省の土木出張所にも一寸居られて、河川改修にも携はつたことはあるが本省の技術課長となつてからは全國各府縣の土木行政や土木事業の監督と指導の任に當つて謂はゞ各府縣の土木課長技師の元締をやつて適材を適所に當て欲めて、最も親切に克くこれ等の人々の世話をされたものぢや……技手技師等の大親分であつたと云つてよい。

と氏は地方技術者……技師等は當時博士の指導を受けたものは殆んどない有樣であつたと縷々述べられた。

勿論人事の移動に關しては博士が掌握してゐる譯けではないが、併乍ら事實は博士が握つてゐたのと同樣で卽ち技術者は事務系統の人々とその仕事上の性質が違つてゐるのでこの仕事にはこう云ふ技術者が適任であると博士は熟知して居るので全國に亙る技術者の移動等は大抵博士が事實上やつて居たやうである、故に博士は萬遍なく適材を適所に置いて指導監督したものである。

技術界の棟梁の材

こゝで話しは一寸と止切れたので筆者は博士の性格といふやうなことについて尋ねると氏は。

實に圓滿の人であり又非常に親切の人であつた而して沖野サンのやうに小言を決して云はなかつたが博士の在生中は勿論のこと今尙ほ博士の指導を受けた技師技術員達ちはその德を慕つてゐる、かやうな次第であるから博士直接には土木事業については差したる事業を殘してはゐないが、全國各府縣の技師等を克く働らかせて我國の土木事業の進步發達に寄與した功績は偉大である、內務省に始めて沖野技監と並んで地方土木に功勞のあつた人である。

茲で話しは轉じて博士の趣味と云つたやうなことに及ぶ

と、藤宮氏は。

酒は好きで少々飲んだやうだが、飲めばなか〳〵愉快の方で時々追分を唄つたものぢや、讀書は實に好んで英佛等の專門書は勿論、專門外の各書に亙つても常に書籍を手に離さず讀んで居られたやうであつた。

と語られて最後に氏は。

私は山形縣の土木課長に來る時に博士は……酒は飲んでもよいが、喧嘩するなよ……と云はれたことを今に記憶して居る。要するに博士は當時事實上技術者の進退は一つに博士の寸方にて定めて安全なる總元締めとして公平無私に異々その人の長短を觀察して夫々適當なる仕事に當らしめ以て頗る懇切に指導されて夫れ〳〵その成績を揭げしめたことである云々。

と、これが博士と同鄕であり又博士の生前に於いて指導を受け最も博士の長短を熟知せる藤宮氏の談であつた。

こゝに於て筆者の洞察した博士は、技術家としては勿論、その學識才能に於いて群衆に秀でて居ることは博士が

多年帝大の教授としてのその講述を見れば判明するのであるが、亦その他面に於いて多分に行政的の手腕力量を要してゐたと思はれるのである。即ち博士は地方技師を克く指導し以て異々其の人物を洞見して所謂適材を適所に配置して土木技術の向上と發達に萬遺憾なからしめたるが如き以てこれを證するに餘りあるのである。また博士はこれ等全國各府縣に散在する多數の技術者をして心底より敬慕せしめたのは一つに博士の崇高なる人格の然らしめたところである、これは即ち博士の常識に富む圓滿なる性格と德望と親切心が至大なる力となつて、不知の間に多數技術員の頭腦に浸透して自然的に博士を敬慕する動機となり、又博士の指導なれば事の如何を問はずこれに喜んで服從する心を惹起したのであると思はれるのである、他からも聞くところに依ると博士は青年時代に於いても博聞强記にして舉措動作の如きも亦尋常の青年と其類を異にしてゐたとのことであるが、その才識の非凡なるに加ふるに公平無私正義公道の觀念に富んで圓滿なる人格と高き德望の持主として、

竟技術界に於ける棟梁の材であつたと思はれるのである。

土木學會と博士

博士はかやうに多年內務省の技術課長として所謂地方技術員等の元締であつたが、その間に於て幾多土木局長は變つてゐる、茲に一寸算へて見ただけでも鈴木、南部、田邊、仲小路、大塚、水野、久保田、下岡、小橋、堀田氏等々と十氏を數へられるが、これ等の諸氏は總て博士の崇高なる人格と識見に於いて地方技術のことは博士に全然一任して居て何等の間違いはないとの確信を持つて居たやうである。而して前記した如く博士は直接土木事業には功績を遺さなかつたが、間接的には多大の功勞者であつたことは否定することが出來ないのである、彼の土木學會は泰西諸國の工學界に於いて各專門家が競ふて斯界の研鑽に從事して孜々として倦まず各自の研究實驗の結果を發表討議するの機關として即ち學會を創立して以て刊行物等を頒布して恒に斯學の進步發展に寄與して居るに鑑み我國に於いても斯くの如き學會の設立を見るを得ざりしは誠に遺憾の極であると共に工學界の一大缺點とされて居たが、去る大正二年の九月に土木學會を設立して以て會誌を刊行し又は研究討議の途を開いて汎く意見を交換し以て我が土木學の進步と土木事業の發達に資したるは狹義に解釋すれば斯界のため廣義に見れば國家全般のため誠に意義深き有益なる事柄に屬するのであるが、博士は該會の創設に對して設立特別委員として先輩の古市、沖野、野村の各博士と共に多大の盡瘁をなし次いで設立後は古市公成博士會長沖野忠雄、野村龍太郎兩博士の副會長に當選すると共に石黑五十二、中山秀三郎、日下辨二郎、古川阪次郎、白石直治、廣井勇、仙石貢の諸氏と共に常議員に當選して本會の使命たる即ち治水、港灣、鐵道、道路、橋梁、上下水道、水力發電。都市計畫、砂防、灌漑、排水等國民の利用厚生、國家資源の開發、並に文化の向上に極めて重要なる關係を有する、所謂國家社會の發展、人類の福利增進に寄與すべき工學部門に對して古市會長を補佐して全會員と協力してその目的達成のために努力されてゐる。

博士と震災豫防調査會

更に博士は震災豫防調査會委員として相當の貢獻をなして居るが、元々同調査委員會は政府は明治二十四年十月に突如して發生したる彼の濃美の大震災に端を發して、同二十五年三月に古市公威、平田東助、菊地大麓、和田維四郎、辰野金吾の五氏に調査會設立の取調委員を命ぜられ其の結果同年六月に至つて勅令を以て震災豫防調査會官制を公布したのであるが、本會の使命たる研究目的は先づ第一に如何なる材料構造は最も能く地震に耐ふることを得るか更に建物の震動を輕減するの方法ありや、又如何なる種類の建物は危險なるか其の取締法如何、我國に於ては如何なる地方は最も震災多きや、又如何なる地盤は最も安全なりや更に地震を豫知する方法ありや否やの大體六項目に亙つてゐるが畢竟地震を豫知する方法の有無と地震に對して其の災害を極度に輕減する計畫の研究にあるやうであつたが近藤博士はこの調査會の委員として各委員と協力して彼の關東大震災の結果に鑑みて帝都復興に關する當局提出の貴重なる調査資料即ち耐震火構造は今後大地震に遭遇しても能く之に耐へ、又其後も依然として耐火性を失はない家屋橋梁等の構造樣式の標準に定むること、耐震火家屋を列ねて防火線として之を大道路の兩側に配置すること、防火又は避難用として大道路、地下道、溝渠、濠水池、公園等を改修或は新設する場合に於いては地質或は震度分布、東京の風の習性、防火に適する樹木の種類等の顧慮、及び大地震の際發火の原因となるべき化學藥品の保管法、爐火、電氣、瓦斯、石油、焜爐等の取締法、並に臨機處置法の制定、延燒を助長する築造物、即ち高樓建物又は屋上における可燃構造の如きものゝ取締法の制定、更に消防用の水利を興すと共に現在消防に使用し難き流水上水に於いては至急其の利用の途を開くこと、並に地震に歸因する火災について市民の訓練を奬むること、等々を擧げてゐる、一體關東大震災の損害の九割五分までは火災に依つて生じたるものなれば震災豫防調査委員は大震火災後に始めて博士等が鋭意調査の結果かやうに政府當局に意見を吐露してゐる、其後近

藤博士等は內容の具體案について、地震篇、地變津浪篇、建築篇、土木篇、工作物篇、火災篇等震災豫防の見地から作成したる貴重なる調査報告をなして居るが、その內土木篇は博士等の所管として最も努力したもののやうである。

博士と臨時治水調査會

また博士は臨時治水調査會の委員に任命されて全國治水計畫の基礎確立に各委員と共に相當努力されてゐるが、元々この臨時治水調査會の發動は明治四十三年に於いて全國各地方は未曾有の大水害のために非常なる慘事を出現したので當時の政府はこれに鑑みて治水計畫の根本的樹立のために同年十月に勅令第四百二十三號を以て本會の官制を公布したのであるが、本會設置の目的は要するに內務大臣の監督に屬して、臨時治水に關する重要事項を調査審議し以て關係各省大臣に建議するものである、而して同會は審議の上根本的治水の計畫を樹立して以てその計畫を河川改修と砂防との二工事に別つて河川改修には河川法に依り國の直轄事業として改修すべき河川を定め、又砂防工事は河川改修の計畫に伴つて直轄河川の流域に對しては國自ら之を施行することを原則となし地方廳に於いて施行するのについては國庫から相當の補助を與ふることとしたのである、爾來治水事業は着々と進行して曩に決定したる第一期河川中には既に竣工せしもの及び竣工に近づきたるもの數箇川に達したるのと一面には況狀の變遷產業の狀況等治水畫計上更に調査を必要とするものあるに至つたので、更に大正十年一月に第二臨時治水調査會官制の公布を見たのであつたが近藤博士は此際同會の委員を仰付けられて、この第二次調査會にて行ひ審議の結果既に國に於いて施行中の河川並に砂防工事の外に第二期河川其の他から更に五十七河川を選定して大正十一年度以降二十箇年內に施工せしむるのを適當と認め以て順次繼續事業として帝國議會の協贊を求むることとなつたのであるが、この結果全國に亙る治水計畫の基礎が確立されたと云つてよいのである、而して近藤博士はこれ等の審査會議に於いて常に議事の審査に當つて本會の目的達成に努力してゐる。

其他博士の關與した仕事

其他博士は明治神宮造營局に參與して、長く明治大帝の神ましまします、御造營の事業に當つて寄與して居るが又他面鐵道省の技師を兼任して軌道監督に關する種々の件について博士の該博なる技術上の智識は復雜なる軌道問題を處理するに役立つてゐるのみならず、當時農商務からも漁港修築に關する調査を委囑されて全國各漁港の調査をなし以て漁港修築の基本的問題の解決等に貢獻してゐるところは多大である、又他面東京市の道路問題についても全體都市施設に於いては道路は市民活動の基をなすところの交通を掌る機關で恰も人體の血管の如き重要なる役割を持ち、更に都市の美觀と市民の保安保健上に於いても極めて重要なる地位を占むるものであるに拘らず、東京市の街路は江戸時代の城下町の所謂町割を踏襲したものであつたから近代的意義に於ける交通の利便等の如きは全く顧みられなかつた狀態であつた、嘗て一外紙の記者が東京市の道路を評して「これは道路でなく將來街路と豫定された土地」と酷評したのも豈ち惡評のみではなかつた、この帝都の路面改良事業に對して、道路改良會は設立直後に於いて東京市路面改良計畫調査に着手して、その結果實施を促したのであるが、當時博士はこの調査事業に關與せられて東京市街路鋪裝工事計畫調査を本會關係の他の人々と共に完全せられたことは博士の力に俟つところが多いのである。更に博士は本會が我國の幹線道路たる東海道の自動車踏査を行ひ以て本線交通の狀態を詳細に實地觀察して、其の改良に資することとなしたる際の如きは副會長石黑五十二博士常務理事堀田貢氏等と共に理事としてこの擧に參加せられて詳さに沿道を視察し爾來攻究を重ねて理事會の議を經て大正十一年六月にこの調査書を公にしたが、この結果沿道府縣はこの調査書を參考として事業計畫を進めたやうな有樣であつた、この企圖に關しても博士は終始貢獻せられてゐる。又本會が兼に道路法の施行に伴つて道路工學の研究は最も焦眉の急なるに着眼して屢〻道路職員の講習會を開催したが、博士は帝大に教授として講義の傍ら最も熱心に該講習會にも

講師として毎回出席して「都市と道路」と題してその豐富なる學識を以て懇切に講演せられたのであつた。……茲に拙筆を擱くに當つて、筆者は各方面から漏聞したる博士觀を綜合して觀察すると繰返して云ふまでもなく博士は人格高潔にして毫も名利を求めず、常に溫厚圓滑敢て人と爭はず故に圓滿德望を以て後進者を懇切に指導し恰もその識見や高大にして其の專攻するところの學識は之を實地に應用するも亦後進者を啓發せしむるにも多大の貢獻するところがあつたやうである。而して常に自己を沒却して一つに本邦土木事業の進步發達に意を注ぎ、大所から達觀して說く所公明卒直であつたことは調査會に於ける委員としての發言を見ても察知出來るのである、先づ當時に於ける我が土木技術界の棟梁の器たると共に國家人材の一人物であつたと思はれるのである。記して拙稿を終ることにする。

× × × × × ×

○若葉吟社詠草（鳥の巢の卷）

軒の巢へ燕來りぬ雨靜か　靜如
老松の巢懸け明るし崖の波　同
森の巢へ夕田を歸る鴉かな　同
鳥の巢や古りゆくまゝに大藁家　蕗邨
巢がくれに羽ばたく雛や杉の秀　同
鳥の巢や代々木の杜の茜して　同
覗く巢に今朝孵りたる雛五つ　東邊僕
口ばかり大きく雛の巢に並ぶ　同
鳥の巢や樅の木高き留守の家　藝仙
雲晴れて鳥の巢見ゆる榎かな　玉葉

○

カナリヤの籠の巢窓の陽を吸へり　野狐禪
鷹の巢や山藤搦む枝垂れ松　同
巢の燕首並べつゝ餌を待てり　同
蛇浚うて鷲起つて高し梢の巢　同
土くれを踏み落しけり巢の燕　同